

呉語の「蚊」音について

秋 谷 裕 幸

1. はじめに

呉語諸方言における「蚊」の音形はかなり錯綜している。私見によれば、それは三類に分類できる。本稿ではそれらを「蚊A」、「蚊B」、「蚊C」と稱する。「蚊A」はさらに二類に下位分類することができ、それぞれを「蚊A-1」、「蚊A-2」と呼ぶ。これらの来歴の解明は、呉語史とりわけ呉語音韻史が解明すべき重要課題の一つと思われる。

呉語諸方言における蚊（か）を表す語形には「蚊子」「蚊蟲」等があるが、本稿では蚊（か）を表す語に用いられる「蚊」の音形のみに議論を集中させる。

2. 「蚊A」

本類は呉語においてもっとも広く観察される音形である。それは「蚊」の中古音、臻攝三等文韻微母、『廣韻』「無分切」と規則的に對應し、調類以外は『廣韻』「亡運切」の「問」（たずねる）と同音になる。

この類は聲母の音價にもとづきさらに二つの類に下位分類することができる。

2.1 「蚊A-1」

呉語において最も広く観察される「蚊」音は、鼻音mを聲母とし、「問」及び臻攝一等魂韻明母、『廣韻』「莫奔切」の「門」と同音になるこの「蚊A-1」である。以下、いくつか例を挙げる¹⁾。

	蚊	問	門	所據文獻
蘇州（太湖片蘇嘉湖小片）	mən ²	mən ⁶	mən ²	北京大學（2005）
紹興（太湖片臨紹小片）	mẽ ²	mẽ ⁶	mẽ ²	王福堂（2015）
寧波（太湖片甬江小片）	məŋ ²	məŋ ⁶	məŋ ²	湯珍珠等（1997）
溫嶺（台州片）	mən ²	mən ⁶	mən ²	阮咏梅（2013）
温州（甌江片）	maŋ ²	maŋ ⁶	maŋ ²	北京大學（2005）
金華（金衢片 ^{2）} ）	məŋ ²	məŋ ⁶	məŋ ²	曹志耘等（2016）
雲和（上麗片 ^{3）} 麗水小片）	məŋ ²	məŋ ⁶	məŋ ²	曹志耘等（2000）

「蚊A-1」と同類の「蚊」音は、呉語ばかりでなく他の南方方言においても観察される。まず徽語績溪荊州方言と客家語梅縣方言の例を挙げる。

	蚊	問	門	所據文獻
績溪荊州（徽語績歙片）	mɛ ²	mɛ ⁶	mɛ ²	趙日新（2015）
梅縣（客家語粵臺片梅惠小片）	mun ¹	mun ⁵	mun ²	北京大學（2005）

贛語と湘語では「問」の固有音形が失われてしまっていることが多いものの、元々は績溪方言や梅縣方言のような對應状況だったと思われる。

	蚊	問	門	所據文獻
黎川（贛語撫廣片）	mɛn ²	uɛn ⁶	mɛn ²	顏森（1993）
長沙（湘語長益片長株潭小片）	mən ¹	uən ⁶	mən ²	北京大學（2005）
雙峰（湘語婁邵片湘雙小片）	mien ¹	uan ⁶	mien ²	北京大學（2005）

2.2 「蚊A-2」

呉語宣州片のいくつかの方言では、「蚊」の聲母が官話諸方言のように鼻音性を失っている。この類を「蚊A-2」と呼ぶ。この類の「蚊」音は臻攝三等文韻奉母、『廣韻』『符分切』の「墳」と同音になる。以下、二例を挙げる。

	蚊	問	墳	所據文獻
高淳古柏（宣州片太高小片）	bəŋ ²	bəŋ ⁶	bəŋ ²	謝留文（2018）
宣城雁翅（宣州片銅涇小片）	pfiən ²	pfiən ⁵	pfiən ²	沈明（2016）

高淳のb、宣城のpfiはともに*vに由来する。前者については侯超（2018）に詳しい^{4）}。古屋（1983）が夙に指摘するように、微母と奉母がともにvで同音になる現象は、中國語方言中ほぼ呉語においてのみ観察される。蘇州周辺の

方言（崑山）では遅くとも16世紀中葉にはこの音韻特徴が存在したらしい（丁鋒 2001：137、265等）⁵⁾。興味深いのは、他方言には観察されないこの特徴が呉語にとっては固有のものではなく外部からの影響により生じたという点である。微母と奉母の呉語固有の音形は、それぞれmとbである（古屋 1982：72）。Norman（1997：25）によるならば、微母の鼻音特徴消失は官話方言を非官話方言から区別する音韻特徴の一つである。呉語における微母のvは官話方言に由来するに違いない。ほとんどの呉語方言においては、陽調に有聲音聲母のみが分布する。微母と奉母の同音化は、このような音韻體系上の制約をもつ呉語が官話方言の微母v、奉母f⁶⁾を受け入れた結果であろう。陽平の「蚊」と「墳」を例にすると次のようである。

官話方言			呉語諸方言	
微母	蚊 vən ²	→	微母	蚊 vən ²
奉母	墳 fən ²	→	奉母	墳 vən ²

呉語の陽平にはfが分布しないため、官話方言の奉母fをvで受け入れざるを得なかった。その一方、音價としては奉母が有聲特徴を回復している点が興味深い。

2.3 本章のまとめ

臻攝三等文韻微母、『廣韻』「無分切」と規則的に對應する「蚊A」類には、鼻音mを聲母とする「蚊A-1」と、非鼻音*vに遡る聲母をもつ「蚊A-2」の二類が存在する。「蚊A-2」は官話方言に由来する外來音形である。

3. 「蚊B」

3.1 現代呉語方言における「蚊B」

聲母は鼻音mであるが、臻攝三等文韻微母とは對應せず、介音iあるいは主母音iを有する「蚊」音を、「蚊B」と稱する。「蚊B」は臻攝三等眞韻明母「民」と同音となる一方、「問」とは異なる韻母をもつ。この音形は金衢片と上麗片の一部方言にのみ分布する。以下、これまでに見いだしたすべての例を挙げる。

	蚊	民	問	所據文獻
永康（金衢片）	mieŋ ²	mieŋ ²	muə ⁶	曹志耘等（2016）
武義（金衢片）	min ⁻²¹ ～蟲	min ²	muo ⁶	曹志耘等（2016）
開化（上麗片上山小片）	miŋ ²	miŋ ²	mɛ ⁶	曹志耘等（2000）
遂昌（上麗片麗水小片）	miuŋ ²	miuŋ ²	məŋ ⁶	曹志耘等（2000）

上麗片上山小片廣豐方言における「蚊B」については、4.3で述べる。

浙江省壽昌方言は、呉語に隣接して分布する徽語嚴州片に屬する。この方言にも「蚊B」と同じ性質の「蚊」音が現れる。

	蚊	民	問	所據文獻
壽昌（徽語嚴州片）	mien ²	mien ²	uen ³	曹志耘（1996）

「問」の音形は外來音である。「門」の音形はmen²である。

上麗片麗水小片慶元方言の「蚊」音は「民」と同音ではないが、介音iを有することから見て、「蚊B」と近い來歴をもつ音形と思われる。

	蚊	民	問	所據文獻
慶元（上麗片麗水小片）	miɛ ²	miəŋ ²	məŋ ⁶	曹志耘等（2000）

3.2 歴史文獻における「蚊B」

「蚊B」との関係を想定しうる「蚊」音は、歴史文獻に見いだすことが出来る。

まず『説文解字・虫部』に「蠱、蠱人飛蟲。从虫民聲。……蚊、俗蠱。从虫从文」とある。この記載によると「蚊」は會意文字である。「文」は意味を表している⁷⁾。しかしながら「民聲」が「蚊」の中古音「無分切」に變化するのはやや異例である⁸⁾。一方、「無分切」は「文」と同音である。「蚊」における「文」は聲符でもある可能性がある。「蚊」は「蠱」の俗字とはいうものの、上古音において蚊（か）を意味する語には、「文」と同音の形式と「民」と同音の形式が併存していたのではあるまいか。上古音⁹⁾で「文」は*mə[n]、「民」は*mi[ŋ]であり、両者の主母音は異なっていた。韻部で言うと「文」は文部、「民」は眞部である。中古音「無分切」そして「蚊A」が「从虫从文」の「蚊」に遡る一方、「蚊B」は「民聲」の「蠱」に由來する、このような可能性は考えられないであろうか。

次に時代は下るが、慧琳『一切経音義・卷七十九・経律異相卷第三十一』に「蠱蟲、上音文、呉音密彬反」とある¹⁰⁾。八、九世紀においては、蚊（か）を意味する語に「文」と同音の形式と「密彬反」により表される形式が併存していたことが分かる。「密彬反」で表される音形は重紐B類であり¹¹⁾、重紐A類の「民」とは完全には一致しない。ここで注目されるのは『説文通訓定聲・屯部』「閩」に対する「段借爲蠱」との記載である。「閩」はまさに「密彬反」に對應する重紐B類字である。慧琳『一切経音義』「密彬反」と『説文』「民聲」との繼承関係は認めてよいと思われる。またここで注意を引かれるのは、「密彬反」が「呉音」と認識されていることである。これは現代呉語に「密彬反」と對應する「蚊B」が分布する事実と符合している。

3.3 「蚊A-1」と「蚊B」の先後

第2章で示したように「蚊A-1」と同類の「蚊」音は、呉語以外の南方方言にも分布する。一方、「蚊B」は壽昌方言という例外はあるもののほぼ呉語に分布が限定され、その來歴は『説文』の「民聲」にまで遡る。私としては「蚊A-1」は「蚊B」よりも遅く呉語にもたらされた音形であると考える。

3.4 本章のまとめ

金衢片永康、武義方言及び上麗片上山小片開化、廣豐方言（4.3参照）に現れる「蚊B」は、『説文解字』「蠱」の條に言う「从𧈧民聲」の「民聲」及び慧琳『一切経音義』「蠱蟲、上音文、呉音密彬反」の「密彬反」に由來する音形である。また呉語にとって「蚊B」は「蚊A-1」よりも古い音形と考えられる。呉語において現在最も廣く分布する「蚊A-1」は、外來音形である可能性が大きいと思う。

4. 「蚊C」

4.1 「蚊C」の性質

呉語上麗片上山小片には、「蚊A」「蚊B」雙方と異なる「蚊」音が現れる。「門」とは同一韻母であるが、「問」とは異なる韻母をもつことがこの類の特徴である。これを「蚊C」と稱する。「蚊C」が現れるのは、以下三方言である。

	蚊	問	門	所據文獻
常山（上麗片上山小片）	moŋ ²⁴ ～蟲	mɿ ⁶	moŋ ²	曹志耘等（2000）
江山（上麗片上山小片）	moŋ ³³ ～蟲	mæ ⁴	moŋ ²	秋谷（2001）
玉山（上麗片上山小片）	moŋ ²² ～蟲	mæ ⁴	moŋ ²	曹志耘等（2000）

三方言とも單字音が存在しない。上に挙げたのはこれらの方言において蚊（か）を意味する二音節語「蚊蟲」における「蚊」の音形である。「蟲」の單字音調類は三方言とも陽平である。以下、三方言における單字調と變調との關係を示す。

	「蚊蟲」の調値	想定される單字調の組み合わせ
常山	24+0	陽平+陽平、陽去+陽平
江山	33+313	陽平+陽平、陽上+陽平、陽去+陽平
玉山	22+52	陽平+陽平、陽去+陽平

「蚊」の單字調は陽平か陽去ということになる。

韻母の音價について言うと、「蚊」「門」の主母音は圓唇特徴をもつoであり¹²⁾、この主母音は他の呉語における「蚊」「門」にはほとんど觀察されない。一方、「問」の音形は他の呉語における「問」の音形と對應する。以下、「門」とともにそれと中古音において平行する音價をもつ臻攝一等混韻幫母「本」の音形を挙げる。

	問	門	本	所據文獻
常山（上麗片上山小片）	mɿ ⁶	moŋ ²	pɿ ³	曹志耘等（2000）
江山（上麗片上山小片）	mæ ⁴	moŋ ²	pæ ³	秋谷（2001）
玉山（上麗片上山小片）	mæ ⁴	moŋ ²	pæ ³	曹志耘等（2000）

蘇州（太湖片蘇嘉湖小片）	mən ⁶	mən ²	pən ³	北京大學（2005、2008）
溫嶺（臺州片）	mən ⁶	mən ²	pən ³	阮咏梅（2013）
温州（甌江片）	maŋ ⁶	maŋ ²	paŋ ³	北京大學（2005、2008）
金華（金衢片）	məŋ ⁶	məŋ ²	pəŋ ³	曹志耘等（2016）
雲和（上麗片麗水小片）	məŋ ⁶	məŋ ²	pɛ ³	曹志耘等（2000）

雲和方言の「本」が例外となる以外は、「問」が臻攝一等の「本」と同形で見られている。この點について言うと、「蚊C」が現れる三方言も「蚊A」をも

つ呉語方言と一致している。

以上要するに、「蚊C」の特殊性は「蚊」の主母音oにあり、「蚊C」が現れる常山、江山、玉山三方言における「門」の主母音oもまた他の呉語方言の「門」音と對應せず異例である。

4.2 閩語閩東片における「蚊」と「門」の音形

邵將片以外の閩語方言における蚊(か)を表す形態素は、多くの方言において「蚊」ではなく「蠓」である。例えば莆仙片仙游方言では蚊(か)を「蠓」 $maŋ^3$ という¹³⁾。その中にあって閩東片では「蚊」と「蠓」が相半ばして現れる。

以下、「蚊」を用いる方言における「蚊」音及び「問」「門」「本」の音形を、閩東片の三方言から挙げる。

	蚊	問	門	本	所據文獻
福鼎(閩東片福寧小片)	$muoŋ^2$	$muoŋ^5$	$muoŋ^2$	$puoŋ^3$	秋谷(2010)
寧徳九都(閩東片福寧小片)	mun^2	mun^5	mun^2	$pøn^3$	秋谷(2018)
福州(閩東片侯官小片)	$muoŋ^2$	$muoŋ^5$	$muoŋ^2$	$puoŋ^3$	北京大學 (2005、2008)

寧徳九都方言におけるunとønは調類を条件とした同一韻母分裂の結果である(秋谷2018: 594-597)。つまり、これら三方言では「蚊」「問」「門」「本」が同一韻母で現れている。それは寧徳方言祖語そして閩東片祖語の*uønに遡る(秋谷2018: 594-597、709-712)。「蚊」音に關していうと、それが「門」と同音であり、なおかつ圓唇特徴を有するɔやoの主母音をもつことが注目される。

呉語と閩語の境界地域に分布する閩東片方言では、やや異なる對應が觀察される。

	蚊	問	門	本	所據文獻
泰順三魁(閩東片福寧小片)	$muɔi^{42} \sim 蟲$	$mɔŋ^5$	$muɔi^2$	$puɔi^3$	秋谷(2005)
壽寧(閩東片福寧小片)	$muoŋ^2$	$muŋ^5$	$muoŋ^2$	$puoŋ^3$	秋谷調査

これら二方言では「問」の主母音にɔやoが現れず、「蚊」「門」「本」の主母音とは異なっている。

閩東片における以上二種類の音韻對應を「蚊A-1」「蚊C」を有する呉語と

比較すると次のようである。主母音にɔやoをもつ音形を枠で囲んだ。

	蚊	問	門	本	所據文獻
蘇州（太湖片蘇嘉湖小片）	mən ²	mən ⁶	mən ²	pən ³	北京大學 (2005)
常山（上麗片上山小片）	moŋ²	mʌ ⁶	moŋ²	pʌ ³	曹志耘等 (2000)
壽寧（閩東片福寧小片）	muoŋ²	muŋ ⁵	muoŋ²	puoŋ³	秋谷調査
福州（閩東片侯官小片）	muoŋ²	muoŋ⁵	muoŋ²	puoŋ³	北京大學 (2005)

閩東片から呉語へと北上するにしたがい、ɔやo、すなわち閩東片の音價をもつ主母音が少なくなってゆく。上麗片と閩語が歴史的にきわめて密接な関係にあることは、すでに學界の共通認識と言ってよい¹⁴⁾。「蚊C」そしてこの音形を有する常山等三方言における「門」の音形もまた、上麗片における閩語的特徴とみなすことができるであろう。一方、「問」「本」の音形は、上麗片以外の呉語方言に由來する。上麗片固有の音形は圓唇特徴をもつ主母音であろう。臻攝三等文吻問韻微母字でoŋとなる例が他にないため、上麗片だけ見ていると「蚊」のoŋが例外的對應形となってしまう。しかしながら、以上の推論によるならば、「蚊C」もかつては常山、江山、玉山三方言における規則的對應形であったと考えられよう。

次に壽寧方言における「問」の主母音uに注目したい。以上の推論によれば、壽寧方言の「問」muŋ⁵も呉語に由來する。ところが管見の限りでは、呉語方言における「問」の主母音にuは現れない。呉語における「問」そして「蚊」「門」「本」は呉語の祖語に先立つ段階では*uであったが、呉祖語に至るまでにその圓唇性が失われた可能性が考えられよう。壽寧方言はきわめて早い段階で呉語から「問」の音形を受け入れたことになる。なお*uは、2.1で紹介した梅縣方言の主母音とも一致する。

4.3 上麗片上山小片廣豐方言における「蚊」の音形

4.2では私は、上麗片上山小片常山、江山、玉山三方言における「蚊」音の韻母は、一貫してoŋであったと考えた。この推定に關して、是非觸れておか

なければならないのが上麗片上山小片廣豊方言における「蚊」の音形である。所據資料は秋谷 (2001)。

	蚊	問	門	本	民
廣豊 (上麗片上山小片)	meiŋ ⁻²⁴ ~ 蟲	muə ⁶	moŋ ²	poŋ ³	meiŋ ²

「蚊」が聲調以外「民」と同音である一方、その韻母は「問」の韻母と異なっている。本稿の定義では、この「蚊」音は「蚊B」である。また「門」moŋ²が常山、江山、玉山三方言と同じ音形であるとともに、「本」も韻母oŋで現れることが注目される。これは閩東片と共通の來源に遡る音形と考えられ、呉語一般の音形である常山pɿ³等とは來歴が異なっている。

常山等三方言との音韻對應關係を見ると、廣豊のeiŋは常山等三方言のoŋと對應する場合がある。秋谷 (2003 : 102-103) の議論にもとづき、三例挙げよう。

	蚊	斷	鹽 (ふた)	所據文獻
廣豊 (上麗片上山小片)	meiŋ ⁻²⁴ ~ 蟲	deiŋ ⁴	kiŋ ³	秋谷 (2001)
常山 (上麗片上山小片)	moŋ ⁻²⁴ ~ 蟲	doŋ ⁴	koŋ ³	曹志耘等 (2000)
江山 (上麗片上山小片)	moŋ ⁻³³ ~ 蟲	dəŋ ⁴	kəŋ ³	秋谷 (2001)
玉山 (上麗片上山小片)	moŋ ⁻²² ~ 蟲	doŋ ⁴	koŋ ³	曹志耘等 (2000)

秋谷 (2003 : 102-103) では、廣豊のeiŋとiŋ、江山のoŋとəŋをそれぞれ聲母を条件とする同一韻母の分裂とみなした。そして、この韻母對應に對する四方言の祖語 (處衢方言西北片祖語) 形式として**iŋ*を再構した。しかしながら、この音韻對應が成り立つ兩唇音聲母の語が「蚊」だけであることと、第3章で見たように「蚊B」が常山方言とごく近い關係にある開化方言にも現れることを考えるならば、廣豊の「蚊」音はやはり「蚊B」とみなすべきであり、**iŋ*の韻母對應に含めるべきではなかった。

以上から、常山、江山、玉山三方言に現れる「蚊C」の處衢方言西北片祖語形式を**moŋ* (陽平あるいは陽去) と再構する。一方、廣豊方言の「蚊」meiŋ⁻²⁴は**miŋ* (調類不明) に遡る。

4.4 本章のまとめ

上麗片上山小片常山、江山、玉山三方言には、**moŋ* (陽平あるいは陽去) に遡る、他の呉語方言には見られない「蚊」音、「蚊C」が現れる。「蚊C」は閩語

閩東片と共通の起源を有する音形であり、上麗片における閩語的特徴の一つとみなすことができる。

5. 結論

呉語には三類の「蚊」音が現れる。

このうちもっとも廣く分布する「蚊A」は、『廣韻』「無分切」と規則的に對應する音形である。鼻音聲母mをもつ「蚊A-1」がこの類本來の音形であり、聲母が非鼻音*vに遡る「蚊A-2」は官話方言からもたらされた外來音形である。

金衢片永康、武義方言及び上麗片上山小片開化、廣豐方言に現れる「蚊B」は、『説文解字』の「民聲」及び慧琳『一切經音義』の「密彬反」に由來する音形である。また「蚊B」は「蚊A」よりも古い音形と考えられる。

上麗片上山小片常山、江山、玉山三方言に現れる「蚊C」は、閩語閩東片と共通の起源を有する音形である。

「蚊A」「蚊C」は『廣韻』「無分切」、そしてあるいは『説文』における「从虫从文」の「蚊」に、「蚊B」は『説文解字』の「民聲」及び慧琳『一切經音義』の「密彬反」にそれぞれ遡ると私は考えている。両者は『説文』以前に存在した同一の起源に遡るのであろうが、それがいかなる音形であったかは、上古音研究の今後の課題である¹⁵⁾。

呉語にとって「蚊A」がもっとも新しい「蚊」音である一方、「蚊B」と「蚊C」の先後については今のところ不明である。この問題は、上麗片、それ以外の呉語そして閩語、この三者間の系統関係をどのように考えるかに直結している。小さな問題ではあるけれども、それに答えるためには、呉語史と閩語史の研究をより充實させる必要がある。

注)

*本稿執筆に際し、古屋昭弘先生および査讀を擔當された方から多くの貴重なご意見をいただき、文中に反映させることができました。ここに記し感謝の意を表します。もちろん、本稿中に含まれるであろう誤りや不備に対する責任は、著者である秋谷にあります。

- 1) () 内は『中國語言地圖集（第2版）漢語方言卷』による當該方言の歸屬。調類はアラビア數字によって示す。單字音が存在しない場合は、實際の調値を示す。その

際、調値の前に-を付す。

- 2) 「婺州片」とも稱する。
- 3) 「處衢片」とも稱する。
- 4) 沈明（2013：290）は、宣城雁翅方言において pfi で現れる微母がゼロ聲母に由來すると推定している。しかし、この方言では「魂」と「横」が uan^2 であり、沈明（2013：290）の所論から想定される $*uan^2 > *v\grave{a}n^2 > pfi\grave{a}n^2$ を経ていない。この點から、本文で挙げた「蚊」と「問」「墳」の聲母は $*v$ に由來すると私は考える。
- 5) この音韻特徴が、宋末から元初のころ、すでに存在していたことを示す文献資料がある。馬君花（2008：51）によれば、宋末元初の音系を反映していると考えられる胡三省（1230-1302）『資治通鑑音注』において微母と奉母の同音化が一部存在する。胡三省は呉語太湖片甬江小片が分布する寧海の出身。馬君花（2008）には實例が挙げられていないのであるが、例えば卷九十七「晉紀」十九に「刎、扶粉翻」（「刎」は微母、「扶」は奉母。早稻田大學圖書館藏和刻本による）のような例を確認することができる（古屋先生に教えていただいた）。この例は非鼻音化した微母の音價と輕唇音化した奉母の音價を宋末元初の呉語がすでに受け入れていたことを示すものであるが、それは要するに遅くとも宋末元初までに官話方言の影響が呉語におよんでいたことを意味している。
- 6) 呉語に影響を及ぼした時の官話方言における奉母の音價は完全に無聲化していなかった可能性もある。現に Baxter（2006：84）は Proto-Macro-Mandarin の聲母體系に奉母に對應する $*m$ と微母に對應する $*v$ を再構している。ただしここで音價以上に重要なのは、初期の官話方言において微母と奉母がはっきり區別されていたという點である。なお Proto-Macro-Mandarin における $*m$ と $*v$ の再構に對し、私はいささかの疑問を感じている。まず、陽調に現れる $*v$ が $*m$ を伴わないとしている點。また官話方言において微母と奉母が合流することは通常ないのであり、 $*m$ と $*v$ という近似する音價はその點をうまく説明できないように思われる。
- 7) 具體的にどのような意味なのかは不明。
- 8) 段玉裁も『說文解字注』において「無分切。十三部。此字民聲、則當十二部。疑古本祇有𧈧、而𧈧乃後人所製也」といぶかしんでいる。
- 9) 再構音は Baxter & Sagart（2014）による。[] は音價再構の根據が不十分であることを示す。
- 10) 慧琳『一切經音義』におけるこの記載は李華斌（2015：277）により知った。
- 11) 慶元方言 $mi\epsilon^2$ はあるいは重紐 B 類を反映しているのかもしれない。なお「密彬反」に對應する上古音の一つとして $*mr\grave{a}n$ が考えられるが、これは Baxter & Sagart（2014）が推定する「蚊」の上古音 $*C.m\grave{a}[r]$ とやや近い。本稿注15も参照のこと。
- 12) 常山等三方言において蚊（か）を表す語は「蚊蟲」である。これら三方言における「蟲」音は $d\grave{a}^2$ であり、「蚊」の主母音 o は「蟲」の主母音への同化によるものではない。

- 13) 秋谷の調査による。なお、常山、江山、玉山三方言における「蚊」音は、聲母と韻母は「蠓」に對應しうが、調類が對應しない。また、中國語方言において、これまでに蚊（か）を意味する「蠓蟲」という二音節語も確認されていない。
- 14) 私自身も秋谷（1999）においてこのテーマについて論じた。
- 15) 『説文解字』には「蠓、或从昏。以昏時出也」ともある。「昏」すなわち「昏」の上古音は * $\text{m}^{\text{h}}\text{u}[\text{n}]$ で、文部に屬する。段玉裁が「形聲在其中」と指摘するように、「昏（昏）」は意味ばかりでなく、「蚊」における「文」と同様、聲符の機能をも有している可能性がある。参考に、関連する字の上古音を列挙しておく：「蚊」 * $\text{C.mə}[\text{r}]$ （文部）、「文」 * $\text{mə}[\text{n}]$ （文部）、「民」 * $\text{mi}[\eta]$ （眞部）、「閩」 * $\text{mrə}[\text{n}]$ （文部）、「昏」 * $\text{m}^{\text{h}}\text{u}[\text{n}]$ （文部）。「民」のみが眞部であり、本稿注8で引用した段玉裁の疑念ももっともなことと思われる。『詩經・周南』「螽斯羽、薨薨兮」の「薨薨」(* $\text{m}^{\text{h}}\text{ə}\eta\text{m}^{\text{h}}\text{ə}\eta$)は「蝗の群れとお羽音」（目加田 1960：16）を形容するらしい。「薨」と「蚊」等との音價の類似は注目に値する。蚊（か）を意味する語も究極的には擬聲語に起源する可能性は十分に考えられよう。その上古音を確定しがたいことも、擬聲語起源という觀點から理解することができると思う。

参考文献

（日本語）

古屋昭弘 1982 「『度曲須知』に見る明末の呉方言」。『人文學報』第156號、65-82頁。東京
都立大學人文學部。

——— 1983 「佛すなわち物」。『節令』第3號、14頁。早稲田大學文學部澤田研究室。

目加田誠 1960 『中國古典文學全集 1 詩經・楚辭』。（東京）平凡社。

（中國語）

北京大學中國語言文學系語言學教研室（編）2005 『漢語方言詞彙』（第二版）（重印本）。
（北京）語文出版社。

——— 2008 『漢語方言字彙』（第二版重排本）（重印本）。（北京）語文出版社。

曹志耘 1996 『嚴州方言研究』。（東京）好文出版。

曹志耘・秋谷裕幸・太田齋・趙日新 2000 『吳語處衢方言研究』。（東京）好文出版。

曹志耘・秋谷裕幸・黃曉東・太田齋・趙日新・劉祥柏・王正剛 2016 『吳語婺州方言研究』。（北京）商務印書館。

丁鋒 2001 『『同文備考』音系』。（福岡）中國書店。

侯超 2018 「江蘇高淳方言古奉微母的特殊音變」。『方言』2018年第3期、287-291頁。中國社會科學院語言研究所。

李華斌 2015 『唐代佛典音義中的方音研究』。（北京）中國社會科學出版社。

馬君花 2008 「胡三省《資治通鑑音注》及其語音特點」。『圖書館理論與實踐』2008年第2期、50-52頁。

秋谷裕幸 1999 「也談吳語處衢方言中的閩語成分」。『語言研究』1999年第1期（總第36

- 期) 114-120頁。華中理工大學中國語言研究所。
- 2001『吳語江山廣豐方言研究』。愛媛大學總合政策研究叢書 I。(松山) 愛媛大學法文學部總合政策學科。
- 2003『吳語處衢方言(西北片)古音構擬』。(東京) 好文出版。
- 2005『浙南的閩東區方言』。『語言暨語言學』專刊甲種之十二。(臺北) 中央研究院語言學研究所。
- 2010『閩東區福寧片四縣市方言音韻研究』。(福州) 福建人民出版社。
- 2018『閩東區寧德方言音韻史研究』。『語言暨語言學』專刊系列之六十。(臺北) 中央研究院語言學研究所。
- 阮咏梅 2013『溫嶺方言研究』。(北京) 中國社會科學出版社。
- 沈明 2013「安徽宣城雁翅吳語古並母字今讀音」。『太田齋・古屋昭弘兩教授還曆記念中國語學論集』283-293頁。(東京) 好文出版。
- 2016『安徽宣城(雁翅)方言』。(北京) 中國社會科學出版社。
- 湯珍珠・陳忠敏・吳新賢 1997『寧波方言詞典』。(南京) 江蘇教育出版社。
- 王福堂 2015『紹興方言研究』。(北京) 語文出版社。
- 謝留文 2018『江蘇高淳(古柏)方言』。(北京) 中國社會科學出版社。
- 顏森 1993『黎川方言研究』。(北京) 社會科學文獻出版社。
- 趙日新 2015『績溪荊州方言研究』。(合肥) 安徽教育出版社。
- 中國社會科學院語言研究所・中國社會科學院民族學與人類學研究所・香港城市大學語言資訊科學研究中心(編) 2012『中國語言地圖集(第2版)漢語方言卷』。(北京) 商務印書館。
- (英語)

- Baxter, William 2006. Mandarin dialect phylogeny, *Cahiers de Linguistique-Asie Orientale* 35-1, 71-114.
- Baxter, William & Sagart, Laurent 2014. Baxter-Sagart Old Chinese reconstruction, Version 1.1 (20 September 2014). Online at <http://ocbaxtersagart.lsa.umich.edu/BaxterSagartOCbyMandarinMC2014-09-20.pdf>. Accessed 2015. 6. 18.
- Norman, Jerry 1997. Some Thoughts on the Early Development of Mandarin. In *Memory of Mantaro J. Hashimoto* (Eds. Anne O. Yue & Mitsuaki Endo), 21-28. (Tokyo) UCHIYAMA BOOKS Co., LTD.

* *

作 者：秋谷 裕幸

Author：AKITANI Hiroyuki

標 題：吴语里的“蚊”字读音

Title : Historical Phonology of “Wen” 蚊 in Wu Dialects

提 要: 吴语里的“蚊”字读音可分成三类。[蚊A] 是與中古无分切对应的读音。[蚊A-1] 的聲母为鼻音m (如苏州 mən²), [蚊A-2] 则帶有v等非鼻音聲母 (如高淳古柏 bən²)。[蚊A-2] 是來自官话方言的外來读音。[蚊B] 與“民”同音, 而與无分切不对应, 當源自《说文》“蠹, ……从虫民聲”的“民聲” (如永康 micin²)。这类读音所代表的年代应该早于 [蚊A]。[蚊C] 乃是代表了吴语上丽片和闽语之间密切谱系关系的读音 (如常山 moŋ⁻²⁴~蟲)。

關鍵詞: 吴语 音韵史 蚊 上古音 微母